

岩日タイムズ

発行者

岩瀬日本大学
高等学校
ソーシャルメディア部

三宅 真彩
田中 優斗

今考える戦争と平和

中谷剛さん講演

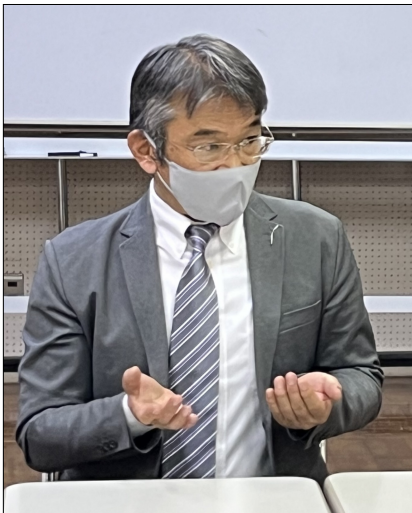
12月3日、栃木県の佐野市文化会館で行われたアウシュビッツの日本人ガイド中谷剛さんの講演に、ソーシャルメディア部員3名を含む本校生徒7名が参加した（三宅）

「ポーランドに生きて、日本を想う」と題し行われた中谷剛さんの講演会は、佐野市文化財団20周年記念行事の一環として、中谷さんの友人で、佐野市民文化振興事業団事務局長の出居博さんにより企画された。

中谷さんは、現在ポーランドにあるアウシュビッツビルケナウ強制収容所内の博物館における唯一の日本人ガイドとして活躍している。

アウシュビッツ強制収容所とは

アウシュビッツ強



中谷剛さん



講演終了後に中谷さんにインタビュー

日に「ウクライナ紛争に関するアウシュビッツ博物館の声明文」と題して、このような文章を発表している。

「アウシュビッツの記憶の地から」

今、私たちにできること

同じ地球に暮らす一人の人間として、私達にできることは何だろうか。講演中、中谷さんはこう語っていた。「先日行われたサッカー・ワールドカップ大会では、試合開始前にイングランドの選手がひざまずいたり、ドイツの選手がレインボーフラッグの腕章を付けたりする場面があった。これらの行動は、ともに黒人や性的少数者など、社会的に弱い立場にある人々

制収容所は、第二次世界大戦中に多くのユダヤ人が過酷な強制労働に従事させられたり、虐殺された「絶滅収容所」であり、いわゆる「負の世界遺産」だ。中谷さんによると、ここに連れて来られた人のうち、75〜80%が到着後すぐにガス室に送り込まれて死亡したそうだ。さらに、総計で90%がこの場所で殺され、100万人を超える犠牲者が出たのにとだ。

そんなアウシュビッツは、今年の2月24

「このような声明を出した背景には、ガイドたちの抱える『戦争の悲惨さを伝えてきたにも関わらず、また戦争が起きが悪かったのかもしれない』という無念さがある」と中谷さんは語る。

この間に何も進歩しなかったかのよう、今でも世界中で戦争を繰り返している。今年起こった戦争の中で最も多くの人が記憶しているのは、ロシアによるウクライナ侵攻だろう。それ以外にも、私達が知らないだけで、今日も世界のどこかで銃弾が飛び交い、銃声が鳴り響いているはずだ。

今、私たちにできること

中谷さんの講演を聴いて 私を感じたこと

今回の講演会では、学校の授業で「世界史B」を選択している2年生の先輩たちが中谷さんの講演会に参加した。何を感じ、何を学ぶことができたか、アンケートをお願いしたところ、快く協力してくれた。

傍観者になつては
いけない

2年の柳田麗さんは「アウシュヴィッツ」という凄惨な歴史を持つ地で活動する中谷さんだからこそ、その言葉の重みがあった。傍観者になつてはいけない。心からの願いなのだと思う。こうした活動をして中谷さんの存在を知り、歴史に目を向けることの重要性を改めて認識することができた」

歴史が行動する
未来は変わる

現在 アウシュヴィッツを訪れる若者が増えていることを知った柳田さん。「どうしてユダヤ人は迫害を受けたのか、人種差別がどんな悲劇を生むのか、知識をもつ

て現地に赴けばきつと色々な見方が変わるはず」

「世の中が悪い方向に進みかけたとき、ただ傍観するのか、行動するのかで未来は変わる。身近な話で言えば、選挙に行くことで自分の意思を示すことができると思う」と、主体的に政治に参加することが大切だと考えた。現代の問題点にもつながり納得

2年の高濱天^{たか}明さんも「アウシュヴィッツで起きた問題から派生して、現代における差別問題、原因、そこから得られるものなど、幅広く話を展開していてとても興味深かった。特に、平等や自由を主張する人でも、いざ自分たちが危機に陥ると、

人は少数派を排除しようとするという話を聞いて、ウィグル問題や、ユダヤ人差別など、今までの歴史でその言葉が思い起こされる出来事がたくさんあって、とても納得がいった」

「今まで他の国際問題について思うことはあったが、こうすれば、ああすればいいと簡単には言えない、単純でない話なんだなと学んだ」と感想を述べた。

他にも「日本は人と違う意見を言うの



をためらったり、同調圧力を感じたりする文化が根強い。特に日本人は政治に関心な人が多く、学校生活でもひしひしと感じることがある。おかしいと思ったことをおかしいと言う大切さをもっとわかってほしい」という意見や「良くも悪くも小さな積み重ねが、大きい問題につながるのだと思った」などの感想を述べてくれた。

編集後記

中谷さんの「アウシュヴィッツは、元収容者が『殺された同胞達を偲ぶ場が欲しい』と言ったがために残された」という言葉が特に印象に残った。

記憶を形に
後世に伝える

フリーアナウンサーの加賀美幸子さんの随筆「メッセージを

「佐野らーめん」「さのまる」

佐野ってどんな街？

今回講演が行われた佐野市は、栃木県の南西部に位置しています。佐野の名物といえば、佐野の美味い水を利用したしょうゆベースの澄んだスープと青竹を使った手打ち麺で独自の味とコクのある「佐野らーめん」(写真上)や、どんぶりの笠をかぶり、名物いもフライの剣を腰にさした侍のキャ



ラで、2013年「ゆるキャラグランプリ」で第一位に輝いた「さのまる」(写真下)など、全国的にも有名な街です。



また、佐野市出身で、村民とともに足尾銅山の鉱毒問題に取り組み、その被害を明治天皇に直訴した田中正造も有名で、佐野市郷土博物館には、直訴状や遺品など豊富な資料が展示されています。

どう聞か「には一度壊したら元には戻らないし、物の形がなければ、自然に忘れてしまう」という一節がある。もし収容所が取り壊されていけば、第二次世界大戦中のユダヤ人大量虐殺は今ほど多くの人に記憶されていかなかったかもしれない。記憶を形にして後世に残すことの重要性がよく分かる講演会だった。

(三宅)

2022年、ロシアのウクライナ侵略により、両軍の兵士のみならず、多くのウクライナ市民の犠牲者が出てしまった。そんな出来事もあつて、私は今回の講演会に関心があり参加した。中谷さんの講演の中で「弱い立場にある人々の人権について考え、尊重すること」「おかしいことにはおかしいと声を上げるべきだ」として、「かつて世界の国々が、ナチスによるホロコーストに抗議できず、他人事のように感じ黙認してしまつた。今がその反省を活かすときだ」という言葉に心を動かされた。残念なことにロシアとウクライナの戦争はまだ終わっていない。しかし、第二次世界大戦の反省を活かし、他国でも戦争に対する抗議を続け他人事とは思わず一人ひとりが戦争について真剣に向き合つていくべきだと感じた。(田中)